

青山学院女子短期大学同窓会北海道支部および中国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ－1952(昭和27)年から1964(昭和39)年卒まで

輪島 達郎

聞き取り対象者一覧

	卒業年	学科	出身地	居住地
A	1952(昭和27)	家政	東京都・横浜市	札幌市
B	1952(昭和27)	家政	稚内市	旭川市
C	1953(昭和28)	英文	旭川市	旭川市
D	1955(昭和30)	国文	足利市	札幌市
E	1959(昭和34)	家政	札幌市	札幌市
F	1961(昭和36)	国文	浜田市	下関市
G	1962(昭和37)	家政	旭川市	岡山市
H	1964(昭和39)	児童教育	静内町	札幌市
I	1964(昭和39)	国文	岡山市	東広島市
J	1964(昭和39)	英文	大洲市	福山市

はじめに

本稿の目的は、青山学院女子短期大学（以下「青短」）の1期生1952（昭和27）年卒から1964（昭和39）年卒、すなわち創立から昭和30年代にかけて青短で学生生活を送った北海道地区および中国地区に在住する10名の卒業生への聞き取りに基づき、青短が提供していた教育環境と教育内容が学生たちにどのように受け止められ、この学生たちが卒業後に歩んだ人生において、青短での学生生活がどのような影響をもたらしたかを考察することで、青短が担った「女子教育の伝統」の内実を明らかにすることにある。

その際、創立まもない青短が、その建学の理念—とくにキリスト教信仰に基づく教育理念—や、女子専門部（1946年に女子専門学校に改組、以下「女専」）時代から引き継いだ伝統的な校風が具体的な学生たちを通じてどのように体现されたかという視点だけではなく、一定の歴史的・社会的条件のもとでどのようなニーズをもった学生たちが集められ、青短は彼女らにどのように働きかけ、彼女らはそれにどのように応え、その結果どのような校風が形作られていくことになったかという観点で分析をすすめていきたい。別の言い方をすれば、青短と在学生、さらには親、教師、地域社会も含めた相互行為の中にこそ、

青短の歴史の出発点が形成された経緯を見ていきたいと考えるのである。というのも、青短がどのような教育理念のもと、個々の学科や教員がどのような教育を行ってきたかという点については、すでに『青山学院女子短期大学の歩み』(1975年)、『50年の歩み』(2000年)、および『青山学院女子短期大学六十五年史』(2016～2018年)¹において十分に総括されていることでもあるし、卒業生たちがそれをどのように受け止め、それにたいしてどのように「感謝」しているかについても、『50年の歩み』と『青山学院女子短期大学六十五年史』に多くの卒業生が文章を寄せている。しかし、卒業生の在学当時および卒業後の生活実態の中から浮かび上がってくる青短の実際の姿は、かならずしも教員が意図した「建前」、あるいは『青山学院女子短期大学の歩み』などのような「正史」とは同じではないだろう。また卒業生の側からしても、短大時代がいかに充実した素晴らしいものであったかというような青春時代の美化にはとどまらない、そして年齢を重ねてようやく気づくことができ、言語化できるような短大生活の実態や意味もあることであろう。このように、卒業生への聞き取りに基づいて、青短が提供した教育環境および教育内容と、当時の在学学生およびその家族や教師など周辺の人々との相互行為を卒業生の証言から収集することによって、創成期に形成され、昭和40年代以降に受け継がれる青短の「女子教育の伝統」を明らかにすることができよう。

また、ここで青短と学生の相互行為と言った場合、それは対象者の学生時代のみにとどまらない。青短を志望するにいたった経緯はもちろん、卒業後のライフキャリア全体が青短との相互行為の観点から分析されることになるからである。

他方、本稿が対象とする卒業生は、北海道地区と中国地区に在住する10名のみである。そこには地域的な偏りもあり、サンプル数としてもきわめて少ない。(このプロジェクトの他の諸報告によってそれはある程度補うことができるかもしれない。)さらに、聞き取り対象となった卒業生たちにみられる階層的な不均衡も問題となりうるであろう。これについては当時における青短生全体の階層的な不均衡を反映している可能性はあるにしても、包括的な調査をふまえていない以上、この少ないサンプルで立証することは困難である。したがって、本稿で示すことのできる「女子教育の伝統」は部分的なものにとどまらざるをえない。

しかしまた、本稿が対象とするのは短大同窓会の北海道支部および中国支部によって推薦された卒業生たちであり、同窓会支部の運営において中心的に活躍してきただけでなく、母校との関わりを喜んで語るという特性を持つ。また、この時代に北海道、中国地方をはじめ地方から青短に入学するさいの本人の積極性やエネルギー、送り出す家族の教育への熱意も考慮する必要がある。

したがって、たとえ少数であっても、短大生活に積極的に関わり、学びを糧として成長することに貪欲な卒業生が対象者として選ばれていると考えるべきであろう。言い換えれば、聞き取り対象となった卒業生やその周囲の人々は、青短との相互行為に人一倍積極的であったのであり、その意味で本稿の対象者は、青短、在学学生、およびその周囲の人々の

相互行為のうちに「女子教育の伝統」を見ようとする本稿の目的に適合的であると考えられる。

以上の目的のため、本稿ではまず1950年から1964年に青短で学生生活を送った卒業生たちが、どのような歴史的・社会的条件のもとで、青短を選択するにいったかという点から議論を始めていきたい。ここでいう歴史的・社会的条件とは、10人の対象者にとっての条件であり、マクロな歴史状況や東京との地理的關係はもちろん、家族、親戚、出身校の教員、知人なども含まれる。

ついで、10人の学生生活は、青短の教育環境や教育内容にたいしてどのように応答していったかが論じられる。各学科の特性や、教育寮である青山寮やシオン寮の伝統を含めた、青短の校風の形成がここでは中心的な主題となる。

最後に、10人の卒業後の歩みをたどりながら、卒業生が青短での経験にたいして、その後の人生においてどのように応答していったかを考察していく。当然のことながら、卒業後の人生は各人各様であるが、そこに共通に見いだすことのできる青短の影響があるかどうか、さらには青短での学生生活で蒔かれた種の育成にはどのようなバリエーションがあるかを検討したい。

本報告ではまた、教職員や在学生のみならず、卒業生の人生全体が青短の歴史を形作っているとの前提に立つ。卒業後のライフキャリアを青短との相互行為の観点から分析する理由はここにある。青短の女子教育の歴史的遺産を継承することは、この分析を必須のものとしているのである。

1. 青短入学の歴史的・社会的条件

本章においては、本稿が対象とする創立時（1950年）の入学者から1964年卒業生までの10名が、どのような歴史的・社会的条件のもとで青短に入学するにいったかを検討したい。

歴史的・社会的条件というばあい、そこには第二次世界大戦、戦後の混乱、高度成長といったマクロな条件から、家庭や地域の期待、東京との距離、家計状況といった個人的なものまでさまざまある。しかしそれらは相互にリンクしながら、各人の進学動機や就学条件を形作っている。そこで本章では、マクロな歴史区分から始めるのではなく、各個人の進学動機と就学条件を形成した歴史的・社会的条件を個別に見ながら、それらの相関性と歴史的推移を明らかにしていきたい。

（1）旧制高等女学校出身者の入学経過

まず、旧制高等女学校（以下「高女」）出身者の青短入学までの特殊事情について見ておきたい。

Aは1952年卒、家政科の1期生である。Aは東京・淀橋で育ち、横浜に転居して、高女

へ入学した。高女では工場での勤労奉仕のため勉学に専念できなかったが、1945年女専に合格。しかし3月29日の横浜大空襲で被災し、北海道に疎開する。戦後、東京の混乱が落ち着きをみせた頃、青山学院から女専別科経由での短大への入学をすすめられ、それに従って上京した。

Aの青短への入学経過からわかることは、1950年の青短創立前から、青山学院が戦中戦後の学制の混乱状況に対応していた状況である。Aの場合、高等女学校卒業後1945年度に女専への入学が内定していたが、東京大空襲によって青山学院が被災し、またA自身も横浜大空襲によって北海道に疎開していたため、青山学院の方から創立予定である短大への入学をすすめられたという。Aのばあい、5年制高女卒業の資格だったため、短大への入学資格である新制高等学校卒の基準を満たすためには1年間女専別科を経由する必要がある。つまり、青山学院は1948年度中には1945年度の女専入学予定者であった札幌のAになんらかの形で連絡していたことになる。このような青山学院の対応は、1945年度女専入学予定者すべてにたいして行われたかどうかについては不明である。

BもAと同じ1952年卒、家政科の1期生であるが、青短への入学経過はAとはかなり異なる。Bは修業年限が4年に短縮された1943年の翌年、1944年に高女に入学し、高女3年生となった1946年に修業年限が5年に戻るといふ混乱を経験した。Bには1948年度をもって高女卒業資格が与えられたが、新制大学・短期大学に進学するためには、1949年度にもう1年新制高等学校に在籍する必要がある。そこでBは、1949年度は新制稚内高校に1年間通い、青短に入学した。したがってBは、Aと同じく旧制高等女学校に入学していたが、Aと異なり新制短期大学への入学要件を満たす新制高校の卒業資格を得ることができたため、青山学院側からの特別な対応を必要としなかったことになる。

その一方、文科英文専攻（以下「英文科」）2期生であるCは、1948年度に発足した新制高等学校に当初から入学しており、学制の混乱を経験していない。もちろん、この事例だけをもって2期生以降のすべての学生が新制高校しか経験していないことにはならないが、少なくとも満18歳で青短に入学してきた学生はすべて同様であった。したがって、本稿の対象者についてはAとB以外の卒業生はすべて、新制高校の入学・卒業者である。

（2）志望動機の推移

つぎに、対象者たちの志望動機、あるいは主体的な志望動機でなかったとしても、少なくとも志望するにいたった経緯を抽出し、それが青短の歴史とどのように関わっているかという点について見ていきたい。

①創立期（1950～62）

まず、1950年の青短創立時に入学したAとBから、1960年に入学したGまでの10年間でひと区切りとして志望動機を検討しよう。

家政科1期生のAについては、幼少時に柏木教会の幼稚科に通っていたことに加え、5

歳上の姉が立教女学校に在籍しており、キリスト教に親しんでいた。Aの家族は熱心な仏教の信徒であったが、子どもたちにキリスト教教育を受けさせることには躊躇がなかった。また、Aの女学校に青山学院卒の若い家政科の教師が赴任し、この教師のもつ能力や品位が青山学院へのあこがれをかき立てた。まだ短大としての実績がなかった青短であったが、短大創立以前における青山学院の女子教育の成果が、青短の評価基準として参照されていたのである。

同じく家政科1期生のBについては、姉がすでに上京して日本女子専門学校（現・昭和女子大学）に通っていたこともあって、妹のBも東京の学校に進学させたいという希望を高女の教員に伝えたところ、実践女子大、昭和女子大とともに青短を勧められたという。ここでも、高女の担当教員が創立前の青短を勧めたところに、青山学院の既存の女子教育への信頼があったと推察される。

英文科2期生のCに関しては、東京に叔母が嫁いでいたことが上京を可能にする環境として作用したが、親からは進学するなら短大と言われ、東京の短大なら東京女子大学短期大学部（以下「東短」）か青短と考えていたという。Cは新制高校の1期生であるため、女子の中等教育が18歳で修了することが高校入学当初から前提とされていた最初の世代である。したがって、医専や女高師に進学する例外を除くと、専門学校や師範学校専攻科を20歳で卒業するのが女子にとっての最高学歴であったそれまでの通念からすれば、短大は高等教育の現実的な選択であった。四年制大学への道が開かれたばかりの時代にあって、それはまだ女性にとって費用面や婚期の遅れなど多くの犠牲をともなう選択だった。そのようななかで、東短とともに青短が最有力の志望校となり、また共立、実践、昭和の各短大は「滑り止め」と位置づけられていたことから、短大創立以前から青山学院の女子教育の名声と信頼がすでに地方においても確立していたことがわかる。

続いて、文科国文専攻（以下「国文科」）4期生、1953年入学のDの場合を見てみよう。Dは結婚後北海道に移住したが、関東地方北部の伝統的工業都市、足利の公立女子高校出身である。Dは早稲田で文学を学びたいという夢を持っていたが、女子は短大に行くべきとの親の意向によって、東短と青短を見学した結果、青短のほうが「楽しそう」という理由で青短を受験した。Dの世代においてはすでにどちらの短大も1期生が卒業していたが、まだ卒業生の活躍や評判の形成には日が浅く、東短か青短に絞られた背景にはやはり両校の前身校あるいは青山学院全体の評判があったであろう。またDの場合、見学のために両校を訪問することができる地域に在住していたことも、最終的に青短を選択する結果につながった。Dの「楽しそう」という判断の具体的根拠はかならずしも明確ではないが、Dのアカデミックな指向性からすると、遊興や娯楽を意味していないことに間違いはない。

1957年入学、家政科8期生のEの場合、すでに青短は6期の卒業生を輩出しており、加えて2人の姉のうち長姉は女専卒、次姉は家政科1期生だったこともあって、東京で高等教育を受けるに際して青短を選択することに迷いはなかった。さらに、札幌教会牧師で

あった川尻正脩（札幌教会在任期間1923—1929）²の妻、川尻知恵がシオン第一寮の寮監であったこともEの進学を後押しした。全国的な大企業の創業者のひとりであり、また札幌キリスト教界に重きをなした父とその一族にとって、娘たちの青山学院への進学は安心を保証するものであったことであろう。

1959年入学、国文科10期生のFの場合は四年制大学への進学が選択肢として排除されていなかった。軍事保護院医官を務め、浜田市で開業していた医師の父をもち、経済的にはそれが可能であった。兄がすでに医学部に進学し、弟も医学部志望であったことも関係しているかもしれない。実際、父はFに薬学部への進学を勧めている。しかしFは4年も勉強したくない、そもそも自分は理数系ではない、という理由でこの勧めを断っている。受験時には親戚が教員をしていた共立女子大にも合格したが、本人自身は四年制には行きたくなかった。しかしここで、恵泉女学園普通部と津田塾専門学校を卒業した叔母たちが強力に青短を勧めた。新制大学になる以前の名門女子教育機関を卒業した叔母たちの目には、青短はFのような高校生が入学するにふさわしい短大として映っていたわけである。さらに、同じ高校出身である兄の同級生が青短の国文科に入学しており、彼女の話で自宅で聞く機会も青短国文科への志望をかきたてることになった。

1960年入学、家政科11期生のGもまた青短への進学は親の意向と東京在住の親戚の勧めであった。Gは北海道有数の肥料商社の末娘として「過保護」ではあったがのびのびと育てられ、高校までは親の言うことをよく聞く、素直な娘であった。進路に関しても、親が青短を選んだ。しかし親が自分を「手放し」で東京の青短を勧めることにG自身が驚くほど、親と親戚は青短を高く評価し、信頼を寄せていた。

以上、1950年～1960年における青短入学生の志望動機について総括するとすれば、①まだ社会的評価の定まっていない青短に関して、青短創立以前における青山学院の女子教育の成果を尺度とした志望や、親・教師・親戚などによる勧奨が行われていた。②あらかじめ東京に在住しているきょうだいや親戚の存在が、娘を送りだす親の安心感をもたらせていた。③戦前まで女子の最高学歴はほぼ20歳までという通念によって、女子が四年制大学に進学することは選択肢から除外されていたとまではいえないにせよ、まだ一般的ではなかった、ということが言えるであろう。

②第1回改組後（1962）

つぎに、青短の第1回改組³がおこなわれた1962年以降の入学生について志望動機を検討してみよう。

1962年に入学し、新設児童教育科1期生であるHの場合、中学高校をつうじて寄宿舎を併設した札幌の学校に在籍したが、寮規則や校則に窮屈さを感じ、同じ学園の大学に進学することには抵抗があった。従姉妹がすでに青山学院大学に進学していたこともあって、その父である父方の伯父を頼って青短に進学した。Hは本稿の対象者において唯一、青山学院大学に進学している女性の親戚の存在が進学動機のひとつになっている。1961年には

「女子学生亡国論」がメディアを賑わすほど、女子大学生が増加傾向にあった。それがどれほど地方にまで波及していたかについては別途検証されなければならないが、当時、地方在住の娘を親が「手放す」期間としては、まだ4年という期間は長すぎたのではないかと推測できる。

続いてHと同じ1962年に岡山から国文科に入学したIが進学にあたって親に提示された条件は、「神戸なら4年、東京なら2年」というものであった。神戸であれば岡山まで日帰りもでき、気軽に帰郷できる距離であるのになんて、東京はまだ新幹線も開通しておらず、親としてはやはり「手放す」感覚になったのではないだろうか。(Iの場合、複数の従姉妹が東短に進学していた。) 注目すべきは、「自分はそれほど(東短に進学できるほど)学力がなかった」というIの述懐である。CやDの聞き取りにおいては、東短と青短の入学難易度の差は特段問題にされておらず、在京短大を代表する2校と捉えられていた。ところがIの世代では両校に明らかな差を見ていたのである。開学から12年が経過し、大学の大衆化や受験産業の隆盛もあいまって、歴史や伝統による大学の「格」とは別に、入試難易度の微妙な差によって大学をランク付ける趨勢がこの時代には一般化していたことがうかがえる。

最後に、やはり同じ1962年に愛媛県から英文科に入学したJもまた、兄2人が東京の大学に進学し、姉も東京に嫁いでいた。Jは幼少時から英語が好きであった。英語といえば青山、青山なら四大よりも短大のほうが人気がある、という理由でJは青短英文科を選ぶ。また、青短の英文科を卒業して活躍している高校の先輩への憧れもあった。「英語の青山」のブランド認知が、四大の英米文学科だけでなく青短にも及んでいたことをうかがわせる証言だが、戦前の女子専門部には英文科に相当する学科はごく短期間しか存在しなかった(1941-3年)⁴ことを考えれば、こうしたブランド力は1903年に認可され1920年に閉鎖された青山女学院英文専門家に由来するかもしれない。いずれにしても1960年代には、先述した大学の大衆化と受験産業による大学のランク付けとブランド化が進み、青短もその中で「英語の青山」ブランドを担う短大として認知されていたと言える。付け加えるならば、1962年に文科国文専攻と文科英文専攻が国文科と英文科に改組されたことも、このような文脈において意味づけることができよう。「青山なら四大よりも短大のほうが人気がある」というJの発言も、伝統や校風ではなく「人気」という市場価値が高等教育機関の価値を測る尺度として普及していたことを裏付ける。

以上見てきたように、1962年の改組後における青短への志望動機を形成した要因としては、1960年以前と同様、①地方の高校生にとってまだ四年制へのハードルが高かったこと、②きょうだいその他の親戚がすでに東京に進学あるいは在住していることに加え、この時期に特有な動機として、③大学の大衆化と受験産業の勃興によって、各大学が人気＝難易度によってランク付けされ、この競争の中でブランド化されていく過程で、青短もまた「英語の青山」はじめ、短大上位校としてのブランドを担う短大として認知され始めていた、という事実を挙げることができるであろう。

以上、本章では対象者の青短への入学経過と志望動機を見ながら、入学者の歴史的・社会的条件を探ってきた。青短は、当初は女専の後継校とみなされていたことから、女専（およびその前身である高等女学部専攻科）の卒業生の活躍や社会的評価によって志望されていたこと、そして親、親戚、教師、地域の先輩といった志望者の周囲の人々がこの評価によって対象者に志願を勧めていたことが明らかとなった。またこのような状況は、青短の卒業生が少なく、社会的評価の定まらない1950年代の間続くこととなったが、1960年前後を境として、大学の大衆化が進み、受験産業による大学のランク付けやそれにとまなう大学のブランド化が始まると、「英語の青山」に代表される「青短」ブランドが普及し、それによって志願者が集まり始める。さらに、女子高等教育が20歳で修了する通念がまだ一般的であったことや、地方から東京への進学にたいする不安から、短大への進学を条件に娘を東京に送り出すという構図もこの時代までは根強いものがあったと言えるだろう。

2. 学生生活からみる青短の歴史

本章では、対象者10人の学生生活についての証言から、青短の提供した教育環境や教育内容を、彼女たちがどのように受け止め、それにどう対応していったかを検討することで、1950年の創立から1964年にかけて、青短がどのような校風―各学科・専攻の特性あるいはカラーも含む―の短大として形成されていったかを考察したい。ここで教育環境や教育内容というとき、授業はもちろん、寮生活、課外活動といった、正規のカリキュラム外のものも広く含めて考察したい。とくに青短の寮は教育寮として位置づけられており、地方から進学してきた学生にとって、キャンパスよりも長時間を過ごすきわめて重要な全人格的教育の場であった。そこで本章ではまず、シオン寮がどのような場として成立していったか、という点から対象者の証言を聞いてみることにしよう。

（1）シオン寮の形成とその青短全体にとっての意義

①シオン寮設立以前

シオン寮は1951年5月に設立される。したがって家政科の1期生、2期生であるAとB、および英文科の2期生であるCは入学当初からシオン寮に入寮したわけではなかった。Aのばあい、1949年に女専別科に入学すると同時に、別科のために設立された阿佐ヶ谷の青山寮に入った。一方Bは、短大の推薦で桜新町にある「元軍人宅」⁵に青短生5人で寄宿した。またCは、シオン寮開寮までの約1ヶ月、神保町の叔母の家で過ごした。

Aの入った青山寮では牧師の妻・白井ふさが寮監を務めており、シオン寮と同様に気賀重躬など、大学宗教主任が説教をした。青山寮にはさまざまな年齢や専攻の学生が同居していたとのことで、戦後の学制の混乱のなかで、多様な背景をもった学生たちが別科に集められていたことがうかがわれる。

Bは寄宿した元軍人宅での印象として東京の食糧事情の厳しさを挙げている。朝食は

コッペパンとサッカリン入りの紅茶だけだったことから、寄宿生たちはこの家を「コッペ寮」と名付けていた。この家には英文科1人、家政科2人、国文科2人の5人で暮らしていた。英文科の学生はよく勉強していたので、他の学生たちが騒ぐのをうるさがっていたが、早慶戦に行くなど、シオン寮に移る2年生の4月まで楽しく過ごした。

②寮生の経済的背景

シオン寮についてひとつ考慮に入れておかなければならないことは、1950年代～60年代当時における入寮動機についてである。まず、家庭の経済状況が比較的恵まれていたとしても、娘を入寮させている事実がある。本報告対象者の当時の経済状況をつぶさに確認したわけではないが、実家での暮らしぶりや、教育に割いている資源、あるいは父の社会経済的地位や家業などから、対象者の多くが比較的豊かな家庭に育っている。1980年代以降であれば、そのような学生はおそらく寮ではなくアパートやマンションでの一人暮らしを選択するであろう。80年代以降は、賃貸価格の上昇もあって寮のほうがはるかに安上がりだったのであり、集団生活の不自由さという代償を払ってでも安価な寮生活を選択したのである。しかし本稿の対象者にかんしては、1960年までの入学者7名全員が寮に入っている。それ以降の入学者3名についても1名は、かなわかったけれども入寮を希望した。

その背景として、ひとつには当然のことながら、娘が寮で生活してくれれば親としては安心であるという心理が働いたであろう。それはもちろん、住居のセキュリティという面にとどまらず、厳しい門限や規律によって、都会の享楽や誘惑から娘を遠ざけるという観点によるものである。二つめに、川尻寮監を親または親戚が個人的に知っていて、娘を託したという側面もある（E、F）。川尻寮監は、後に述べるように高潔な人格ときめ細かい配慮によって、寮生や保護者の厚い信頼を得ていた。さらに付け加えるならば、本稿の対象者たちのような地方名士の子女が集っていた青短にあって、キリスト教信仰に基づく教育寮として設置されていたシオン寮が全人格的な教育の場として求められていたということも挙げられよう。地域の名士の子女にふさわしい教養と品位を寮生活で培い、また同じような階層に属する学生たちとの交わりのなかで成長することがシオン寮には期待されていたのである。

③シオン寮設置以降

さて、このような期待を担って1951年5月に開寮したシオン寮であったが、対象者10名のうち7名がこの寮で生活を送ったことは先に述べた。いずれも、1966年に猿楽町に移転する前、金王町時代のことである。

まず彼女たちから異口同音に発せられるのは、第一寮の川尻知恵寮監の働きと人柄にたいする尊敬と感謝である（Fだけは第二寮、飯久保澄寮監であった）。

Bは姉の結婚式と生物学の試験日程が重なってしまったが、川尻が担当教師にかけあった結果、別日程での追試が実現したという。

Cは川尻が耳鼻科に付き添ったことや、埼玉の友人を訪問するさいにお土産を持たせたこと、また就職活動を励まされたことへの感謝を口にした。

Eは寮が近代的な新築であったにもかかわらず、暖房の整った北海道の家屋に比べれば非常に寒かったという印象とともに、川尻のこまやかな配慮のもと、何不自由なく過ごすことができたと言った。

Fはシオン第二寮に入り、寮監の飯久保澄が希望者の寮生を歌舞伎座に連れて行ったことに驚いたという。「なんで寮でそんなことするのかな」と思ったということである。それがのちに実家の母と叔母、東京で働いていた娘の3人を歌舞伎座に招待したり、運営する施設でのリモートによる歌舞伎関係のイベントを開催したことにもつながった。そのような自分の指向性の原点に寮でのこの経験があったこと、またこのような精神的教育こそが青短の女子教育の本質であったのだと、今となってはよくわかるという。

Gは川尻がGの音楽的素養を見抜き、レコード係（夕食後に音楽をかける係）や夕拝のオルガニストとして起用したこと、サークル活動で夕食に間に合わなかった学生たちのために川尻がそっと夕食を用意したこと、前日のご飯が蒸しご飯として提供されることが苦手だったGを見てパンを居室まで持ってきたこと、Gが実家への電話で地震の恐怖を訴えるのを傍らで聞いていた川尻が、Gを比較的揺れの少ない居室に移動させる措置を講じたことなどを語った。また、川尻がある夜不意にGの居室を訪ね、川尻の自室に招き入れて月下美人の開花をゆっくりと眺めたことは忘れがたい思い出であるという。

シオン寮が川尻や飯久保の献身的な働きと、キリスト教信仰に裏づけられた類まれな人格的感化力によって教育寮としての機能を存分に発揮したことには疑いの余地がない⁶。しかしここで注目しておきたいことは、川尻や飯久保の献身に応答し、集団生活や寮行事での役割を積極的に担い、奉仕的に活動した寮生たちも、シオン寮の「寮風」を形作っていったということである。今日の概念を使うならば、シオン寮はサービス・ラーニングの場として、なおかつキリスト教的な愛と奉仕を根底とした学びを実践する場として、学生たちとともに形成されたのである。このような場のあり方はシオン寮内にとどまらず、その後青短の教育実践全体に行き渡る精神となり、それが閉学まで継続した。例を挙げれば、宗教活動委員会の宗教活動や学生部主催の各種課外活動、東日本大震災で組織されたボランティア活動など（これらの中には2012年の改組時に正規課程に組み入れられたものも少なくない）、枚挙にいとまがない。この意味で、青短の歩みはシオン寮の「寮風」が青短全体の「校風」に昇華されていく歴史であったとさえ言えるだろう。

（2）家政科の特性の形成

つぎに、授業を中心とした青短の教育活動が、学生たちにどのように受け止められ、どのような反応を引き起こし、それによって各学科の特性がどのように形作られていったか、という点を検討してみたい。まず、本稿対象者の1期生が所属した家政科から見てみよう。

家政科1期生のAは調理実習や育児、栄養にかんする授業が楽しかったと述懐するが、もっとも高い関心をもって取り組んだのは女専別科における「住宅」の授業であり、この授業で引いた住宅の図面が激賞されたという。Aはこの図面をベースにして自宅の設計まで行った。

同じく家政科1期生のBは大西セチ、野村万千代の調理実習を挙げるが、とりわけ野村は、Bが寄宿していた桜新町に居住しており、Bを自宅に招いて調理実習の材料を自宅の庭で収穫させたという。家政科の修学旅行では、島崎通夫に引率されて唐招提寺や瀧八丁を訪ねた思い出がある。

家政科8期生のEは大西セチの西洋料理の授業に多大な影響を受けたという。とくに印象深い授業だったのは生きた鯛を丸揚げにするというもので、家庭ではできないまったく新しい経験だった。Eが見せてくれた当時の教科書、大西の『欧風料理の基礎』(1949)⁷には隅々にまで書き込みがあり、表紙は激しく損耗していた。Eはのちにみずからが担当した湘南白百合学園の家庭科の授業でもこのテキストを使用し、生徒たちにたいへん好評だったという。大西はクリスマスケーキの実習も行った。Eは札幌に戻ってから自宅で収穫したクルミを使い、それを応用したケーキを友人の喫茶店で販売したという。

家政科11期生のGはアドバイザーでもあった野村万千代から特別手厚い指導を受けた。そのきっかけとなったのは入学式の日、会場への道に迷ったGの母に、野村が声をかけて駅から青短まで案内したことであった。以来野村はGに目をかけ、研究室に招いてよく昼食をともにするようになり、Gが持参した寮の弁当と野村が調理実習で作った料理とを交換した。Gは「過保護で控えめ」な性格であったが、こうした野村との交流によって物怖じしない態度が身についたという。また、Gが38歳でニューヨーク州バッファローから大阪に帰国したとき、野村の求めによって大阪で食事をし、40歳になったらボランティアをするよう勧められた。そして実際に40歳から老人介護施設でのボランティアを始め、50歳のときには三年制の通信教育を受講し、ボランティア士の資格を取得するに至った。

以上、家政科卒の4人の証言を総合すると、とくに実習系の授業においては、家庭生活での実用的な技術の習得よりも、調理や被服の根底にある基礎的な技法や精神を体得させる教育に重きが置かれていたことがわかる。そのような教育はおのずと教員と学生の人格的な交流を要請することから、証言にみられるような親しい交流を成たせただけでなく、卒業後の人生に長く大きな影響を及ぼす結果をもたらしたのである。

(3) 国文科の特性の形成

つぎに国文科について見てみよう。3人の対象者の証言からは、加藤楸邨、川瀬一馬、諸橋轍次の3人の名前が畏怖に近い尊敬の念をとまって聞かれる。

4期生のDは授業の内容よりも、3人の碩学たちの学者としての姿勢やたたずまいに感銘を受けたという。また、川瀬によって興味のないままたきこまれた『花伝書』であったが、のちに謡曲をたしなむようになってからその意味することや川瀬の言葉がありあり

と理解できるようになったという。

10期生のFは3人の学者に加えて馬越宮の名前を挙げ、学生当時授業を担当された先生方がこれほど立派な方々だったとは知らなかった、もっと勉強しておけばよかった、もったいなかった、と述べている。またFは、学科で北陸に「おくのほそ道」の研究旅行に行ったときの印象も語った。川瀬が山道の奥深くに分け入って歌碑を案内したさい、その記憶力に圧倒されたという。

13期生のIもまた川瀬、加藤、馬越に言及し、今思えば幸せな青春だったと述懐する。言い方を変えれば、学生当時には気づいていなかった学的恩恵を、今となっては理解できるということであろう。

このように見てくるとき、国文科においては日本を代表する学者たちによる高度な授業が展開されていたにもかかわらず、その内容を学生たちはかならずしも十分には理解していなかった可能性がうかがえる。とはいっても学生たちが授業に退屈していたわけではない。Fは次のように言う。「そりゃあもう、まったく高等学校では聞いたこともない、どこでも聞いたことがないようなお話ですから、授業中は面白かったですよ」と。碩学たちの豊富で重厚な学識によって展開される講義は、二十歳前の学生たちにもそれなりに興味深いものだったにちがいない。しかし、その真意を理解するためには、やはり相当の年月を必要としたと言わなければならない。であったとしても、学生時代に受けた薫陶は無駄であるどころか、卒業後の積極的な学びへの姿勢をもたらしにいった。Dは謡曲を通じて『花伝書』を読み直し、旅行に行くばあいも勉強を欠かさない。Fにとっては後述する福祉事業や社会活動を幅広く展開するにあたって、「普通の人」では実践しないことを試み、掘り下げる探究的な姿勢につながっている。また何よりも、短大同窓会国文学科会のいまなお続く旺盛な学習活動は、国文科の以上のような特性を象徴している。

(4) 英文科・児童教育科について

英文科と児童教育科については、対象者がそれぞれ2人、1人ときわめて少ないため、一般化できる結論を導き出すことは難しいが、かんたんにそれぞれの授業や課外活動にかんする発言を拾い集めておきたい。

まず英文科2期生のCは外国人教師によるオーラル・イングリッシュの授業が楽しかったと述べ、若い教師であったメアリ・ステアレスとの文通が彼女の死去まで続いたという。

英文科13期生のJも英会話が好きで、2年生になりルセッタ・ハークネスのアドバイザー・グループに参加した。自宅に招かれて、アメリカ料理など本場のアメリカの文化に触れてたいへんうれしかったという。また、Jの学生生活で大きな比重を占めていたのが短大ESSである。他大学や留学生との交流を楽しみ、積極的に活動した。

児童教育科1期生、1962年入学のHは「個性豊かな先生」として、高橋好子、掛井五郎、林三平、非常勤ではあったが瀬田貞二(児童文学)の名を挙げる。いずれも新設学科を立ち上げる意気込みに満ちた教員たちであった。Hは東京での事務職を終えて59歳で北海道

に戻ったあと、「児童文学を学ぶ会」を立ち上げて活動してきたが、このようなところに児童教育科における学びの影響を見ることができる。

本章では、青短創成期のシオン寮と各学科における授業を中心に、青短の校風の成立をみてきた。シオン寮では寮監たちの献身的な働きとそれに答える学生たちの積極的な奉仕が、家政科においては実習を担う教員たちの基礎を重んじる熱意と学生たちとの親しい交流が、国文科においては学究たちの圧倒的な学識とそこに憧憬の眼差しを向ける学生たちが、英文科においては外国人教員との豊かな交流が、児童教育科においては教員たちの豊かな個性と新設学科への意気込みが、それぞれ青短の校風を形作ってきた。この時代にこのような形で生み出されていった校風はその後の時代にも引き継がれ、形を変えながら閉学まで継承されたものと考えられる。

3. 卒業後のライフキャリア

本章では、10人の卒業後の人生に青短との関わりを見ていきたい。青短との関わりといっても、それは同窓会活動や恩師に関わることを意味しない。むしろ、短大時代に受けた影響、身につけた思考方法や習慣、交友関係などがどのように人生全体に影響を及ぼし、各人がそれらをどのように育てていったかという視点を本章では採用する。

また本章では、10人の卒業後の人生を検討するにあたって「ライフキャリア」という概念を使用する。ライフキャリアは継続的な職業経験を意味する狭義の「キャリア」とは異なり、職業、社会活動、家庭生活、育児、介護、再就学など、人生のさまざまな段階における活動や経験の積み重ねを意味する。本章では、短大が直接職業紹介に関わり、青短卒業生への社会的期待が反映されやすい卒業直後の進路選択と、20代半ば、すなわち当時一般的だった結婚年齢以降のライフキャリアとに分けて対象者の聞き取りを抽出していきたい。

(1) 卒業直後のライフキャリア

まず、青短卒業直後に取った進路について見てみよう。

家政科1期生のAは疎開先の札幌ですでに婚約しており、卒業後すぐに結婚して札幌に戻った。

同じく家政科1期生のBもまた卒業後は稚内に帰り、家業や家事を手伝った。翌年には結婚し、旭川に転居した。

英文科2期生のCは学校推薦で東京銀行に就職した。神保町の叔母の家から通うことができたため、応募資格を満たしていたのである。東京銀行では英語力で為替業務に貢献できと思ったが、配属されたのは新橋支店の窓口だった。父の病気のため1年半後に退職し、旭川に帰った。Cによると、英文科生の2～3割が就職したという。

国文科4期生のDは卒業後足利に戻ったが、事情があり、仏教系私立女子高校で4年間国語の教師をした。教師になろうとは思っていなかったため、能力の低さを感じて辛かった。1年後、昭和女子大でおこなわれた夏期研修に参加し、そこで夫となる北海道の教員と出会い、3年後に結婚、退職して北海道に渡った。

家政科8期生のEは実践女子大の食物科3年次に編入学した。大西セチの影響を受け、食物学をさらに学びたかったという。しかし2年間ということもあり、やや物足りなかった。実践女子大卒業後は札幌に戻り、以前広告モデルをしたことがある朝日広告の求人を新聞でみつけて応募し、採用された。すぐに朝日新聞社北海道支社の広告課に出向となり、コンサート、ファッションショー、調理実習など全道で行われるイベントの仕事をした。結婚を機に1年半で退職。結婚後は鎌倉に住み、湘南白百合学園で家庭科の教師を務める。4年後、祖父が起こした農場の継承のため札幌に戻った。

国文科10期生のFは朝日生命に就職した。幼少時こそ父は勤務医であったが、「会社勤め」という働き方を身近に経験していないため、ぜひ経験してみたいと思い、親に相談したところ自力で就職先を探しなさいといわれ、短大の求人の中から丸の内本社ビルが勤務地となる朝日生命を選んだ。朝日生命では文書管理課に配属され、住所録管理業務に従事した。朝日生命はクラブ活動が盛んで、合唱にハイキングにと楽しい会社員生活を送った。1年7ヶ月勤務した後退職し、医学生の兄と予備校生の弟と同居して家事を担当しながら、池坊学園と江上料理学院に通った。この生活を2年間続けた後、1963年10月、23歳で浜田の実家に戻り、翌年4月、24歳で結婚した。

家政科11期生のGは野村万千代から短大の研究室に残る誘いを受けたが、親が許さなかった。そこで旭川に帰り、子ども時代以来のお稽古ごとを再開したが、そのうちのひとつに外国語学校があった。生徒になるための英語の面接を受けたところ高い能力を発揮したため、校長に講師になるよう懇願され、講師として3年間務めた。結婚後も、家庭教師として約36年間受験英語や英会話を指導した。

児童教育科1期生のHは北海道に戻り、北海道電力に就職して札幌の母方の祖父母宅から通勤したが、多くの女子社員が22～3歳で退職するなか、職場に居づらくなり退職。その後は東京在住の父のきょうだいを頼って上京し、実家の援助を受けながらアルバイトをしていた。

国文科13期生のIは卒業後は岡山に帰郷し、家業のカメラ店や家事を手伝い、1965年、21歳で結婚した。

英文科13期生のJは愛媛県教員採用試験(中学英語)に合格し、1971年から愛媛県城川町(現西予市)で中学校教員として勤務。2年後、結婚を機に夫の勤務する広島県でも教員採用試験に合格し、その後定年直前まで中学校教員として勤務した。

ここまでHをのぞいて全員24歳以下で結婚し、職に就いていた者は教員のJをのぞいて退職しているが、これは1950年代～60年代当時の短大卒業生の一般的なライフキャリアであったと考えられる。また、A、B、D、G、Iと、対象者の半数は、新卒採用での就職

を経験していないが、これもCの「英文科の2、3割が就職した」との証言からも裏付けられるように、当時としては珍しいことではなかった。対象者の個性、さらにいえば青短卒業生としての個性が顕著にあらわれるのは、次にみる結婚年齢以降のライフキャリアにおいてである。

(2) 結婚年齢以降のライフキャリア

つぎにセカンドキャリア以降の職業や社会活動を見てみよう。ライフキャリアにおけるセカンドキャリアは就労とはかぎらず、家業経営の支援や、継続的に行っているボランティアなどの社会活動なども含む。家事、子育て、介護もライフキャリアにおける重要な要素であるが、とくに必要なばあいのみ触れることにする。

家政科1期生のAは結婚後、夫の勤務する北海道大学の官舎に8年間住んだ後、女専別科時代に担当教員に称賛された図面をもとにみずから設計した家を建築し、そこに移り住んだ。官舎時代に産まれた3人の子どもの養育とともに、夫の母を100歳近くまでこの家で介護した。夫もまた95歳で死去するまでこの家で生活し、本人も2023年に亡くなるまでここで暮らした。Aの人生は女専別科で指導を受けて設計した家とともにあったと言ってよいであろう。またAは、青山学院校友会札幌支部の副会長としても活動し、のちに短大同窓会を立ち上げ、その初代会長となっている。

同じく家政科1期生のBは嫁ぎ先が食品卸業を営んでおり、専業主婦として生活した。夫のふたりの妹は、Bの影響を受けていずれも青短に入学したという。また娘も青短を卒業している。Bもまた短大同窓会北海道支部の役員として長年にわたって奉仕し、旭川での総会も実現させた。

英文科2期生のCは1957年に結婚すると同時に姑と同居したが、姑を1970年に看取ったあと、1971年から30年間にわたって旭川歯科学院専門学校と幼稚園で英語講師を務めた。その後も英語サークルで活動している。また、女声コーラス「麦の会」のメンバーとしても活動してきた。(短大時代はK A Y合唱団に所属していた。)

国文科4期生のDは4人の子どもの小樽と札幌で育て、その後40代から50代は毎月1週間ほど足利の両親の介護のために札幌から通った。また、独身時代から始めていた謡曲を札幌でも続けている。加えて、夫の釧路赴任時には母の勧めで「友の会」に入会し、交友関係を広げた。

家政科8期生のEは子どもの服を作るために機械編み教室に通ったのを契機に、その教師となり自宅で教室を開くまでになった。生徒が全国コンクールで入賞したり、毎日新聞北海道支社主催のファッションショーに年2回20年間、4、5点ずつ出品したりと、この分野で成功を収めてきた。全日本編物教育教会の役員も務めている。Eはこのような働きについても、家政科で学んだことに基礎があるという。

国文科10期生のFは結婚後、山口日赤病院に勤務していた夫の開業準備のため、まだ乳児だった次女を抱えて2年間看護学校に通い、准看護婦の資格を取得して、1974年に夫の

母が開業していた菊川町（現・下関市）でその医院を承継、夫の母とは別の場所に診療所を開業した。地域のホームドクターとなり、開業25年後に特別養護老人ホームの設置を菊川町に要請され、さまざまな準備を経た後、1999年、59歳のときに夫が理事長となって社会福祉法人菊水会を設立した。以後Fは施設長、業務執行理事として、特養のみならず、デイサービスセンター、グループホーム障害福祉事業所、サービス付き高齢者向け住宅など多数の施設を運営している。また、フレンドシップフォース（ホームステイと国際交流を推進する団体）やスペシャルオリンピックス日本・山口（知的障害者のスポーツ活動を支援する団体）の活動にも意欲的に取り組んでいる。

家政科11期生のGは、1965年、24歳で大阪大学の無給医局員と結婚後、3人の子どもをもうけた。1975年、34歳のときに夫がニューヨーク州立大学バッファロー校にポストを得て、家族でバッファローに転居。この地でホームパーティー、教会、近隣住民、大学職員のウィメンズクラブなどにおけるさまざまな活動への参加を通じてアメリカのボランティア精神を学び、感銘を受ける。そしてみずからもウィメンズクラブでの「ジャパンナイト」をコーディネートし、地域の日本人会の協力も得て成功に導いた。2年後に帰国してからも、先述した野村万千代の助言もあって、老人福祉施設でのボランティアを皮切りに、パリ在住日本人音楽家の演奏会の主催、岡山シンフォニーホールへのパイプオルガン設置のための募金活動、I T C - J (Interactive Training in Communication Japan) の英語スピーチコンテストでの全国優勝、またこのコンテストの審査員や岡山支部長、さらに短大同窓会中国支部長など、精力的に社会活動を行っている。「過保護で控えめ」な性格だったGをこれほどまでに活動的な生活へと導いたのは、バッファローでの経験や、夫が世界中の学会にGを同伴したこともひじょうに大きい。短大で野村万千代に目をかけられ、寮生活では川尻知恵に能力を見込まれて、自己肯定感を高めていたことが原点となっているだろう。

児童教育科1期生のHは、40代になってから麴町にあるI B I（大企業の年次報告書の英訳を刊行する企業）の図書室で文書管理の業務に従事し、59歳まで働いた。東京在住時は出身校である札幌の中学・高校の同期会を組織し、札幌に転居してからは同校の同窓会事務局と青短同窓会北海道支部の役員を務めた。札幌では「児童文学を学ぶ会」の活動も続けてきたことは先述のとおりである。

国文科13期生のIは、1965年に岡山大学の勤務医と結婚し、1970年から夫のメルボルン・モナシュ大学への2年半の留学に同行した。1980年に夫は西条中央病院の院長に招かれ、さらに1994年、リウマチ・膠原病専門病院である東広島記念病院を設立し、現在では7箇所の医療・福祉施設を運営している。また、登録博物館「仙石庭園」を25年の歳月をかけて完成した。Iはこれらの事業の補佐に従事しているほか、短大同窓会中国支部長も務めた。

英文科13期生のJは、結婚後も広島県で中学英語教員を定年直前の58歳まで務めた。夫も教員だったためJの勤務継続に理解があり、子どもを3人もうけた。3人目のときによ

うやく育休制度ができて勤務から1年間離れることができたが、当時の育休は無給だったため、経済的には苦しかった。また、Jの教員生活は中学校が荒れた時代であり、生徒指導に追われるばかりで生徒の心に寄り添うことができていなかったことをいまなお後悔している。退職後は時間講師や、福山市国際交流協会の英会話サロン、外国人支援のボランティアなどを行っている。

以上見てきたように、対象者10人の結婚年齢後のライフキャリアは多様をきわめる。しかし多様ななかにも著しい偏りが見受けられる。それは、医師の妻となった卒業生が10人中4人をも占め、さらに医師となった子をもつ卒業生も同じく4人を数えることである(両者は同一人ではない)。母数が少数であることから定量的な結論を導き出すことはできないが、社会階層論的な考察を加える余地はあるであろう。

もうひとつ、多様性のなかに看取できる共通要素は、ボランティアという形であれ、事業の補佐という形であれ、あるいは職業という形であれ、対象者たちが社会奉仕的な活動に大きな時間とエネルギーを充当していることであろう。寮生活や学生生活で培った奉仕の精神が卒業後のライフキャリアにおいて発揮されたということもできるが、それ以前の段階において、今回の対象者はその多くが事業家、商店主、医師、教員の娘であったという事実注目しておかなければならないだろう。つまり、もともと社会貢献や社会奉仕への指向性や使命感を強くもっている家庭の娘が青短に送り込まれたということである。そのような学生たちが、青短の教育環境や教育理念に触れることで、青短の校風や卒業生の活動を作り出していったのではないだろうか。

おわりに

本報告ではこれまで、青短創成期の10名の卒業生を対象とし、青短入学の経緯を検討しつつ入学者たちのおかれていた歴史的・社会的条件を探り(第1章)、寮生活や授業をつうじて、青短の教育環境と教育活動にたいする学生たちの応答がどのように青短の校風を形成していったかを論じ(第2章)、卒業後のライフキャリアを通して青短での学生生活が人生全体に何をもたらし、言いかえれば対象者たちが人生を通して青短にどのように応答してきたかを検討してきた(第3章)。

ここであらためて青短の教育理念を引用しておこう。

青山学院のキリスト教の信仰にもとづき、「女子小学校」から「青山女学院」を経て現在に至る本学院の女子教育の伝統を継承し、女子の高等教育に専念する

「本学院の女子教育の伝統」とは何であり、それは1950年代から60年代前半にかけて、教職員、学生、保護者、社会にどのように意識され、実践されていたのか。本稿はこの問

題を当時の現役当事者に問いかけるのではなく卒業生に問いかけ、卒業生への聞き取りによって、卒業生自身の入学から現在までの状況と、卒業生たちをとりまく親族や知人を含めた歴史的・社会的状況を検討することによって一定の結論を導き出そうと努めてきた。

こうして得られた結論は、第一に、創成期の青短は、青山学院全体、とりわけ女専の評価に大きくよっていたことから、女専における女子教育の伝統を実質的に引き継いでいたことである。女専は青山女学院高等女学部専攻科以来の伝統を持ち、高女、新制中学・高校における家政科の教員を全国に多数輩出しており、対象者たちの出身女学校やその後継校である高校にも出身者が在籍したことであろう。入学者のみならず、出身学校の教員、保護者やその親戚も、そのような女専の評価によって志願を決定し、あるいは志願を勧めたことが今回の調査からもうかがい知れる。また新制短大の教員たちも、女専の教育水準を念頭におきながら高い教育水準の維持に努めた。寮においても、女専別科の寮として設置された青山寮において、キリスト教的な教育寮としての運営が行われていた事実がみられ、これをシオン寮が引き継いだ。

第二に、このように集められた学生たちが、女専から受け継いだ高い水準の教育と、青山学院のキリスト教的な高潔さや奉仕の精神を青短に期待するような社会階層に出自をもっていたがゆえに、青短がそれらを実際に提供することによって、青短と学生との間に相乗的な反応が起き、それが青短におけるキリスト教的な「女子教育の伝統」の継承を可能にしていたことである。このことはシオン寮における寮監の配慮と寮生の奉仕の相互関係や、高水準の授業とそれにたいする学生の驚嘆と尊敬、あるいは教員と学生の精神的な交流に見て取ることができる。

第三に、女性が20代前半で結婚し、その後は「家庭に入る」ことが当然視されていた時代にあって、どのような形であれ社会貢献あるいは社会奉仕を重視する生き方を青短が学生たちに期待していたことである。この点も、女専時代から家政科教員をはじめとする専門職や、高度な専門的知識と技能を持って社会に貢献する女性の育成に努めてきた「本学院の女子教育の伝統」に根ざすものにほかならない⁸。本稿の対象者たちはがみな、惜しみなく社会奉仕に励み、そこに喜びを見いだす生き方を貫いていることは、本論で見たとおりである。

こうした「女子教育の伝統」は、1960年代後半以降どのように受け継がれ、またどのように変化していくのか、次期プロジェクトの課題としたい。

- 1 青山学院女子短期大学編『青山学院女子短期大学の歩み』（青山学院女子短期大学、1975年）、青山学院女子短期大学編『50年の歩み—青山学院女子短期大学開学50周年記念誌』（青山学院女子短期大学、2000年）、青山学院女子短期大学六十五年史編纂委員会編『青山学院女子短期大学六十五年史』通史編、文集編、資料編（青山学院女子短期大学、2016-2018年）。
- 2 日本基督教団札幌教会『川畔の尖塔—札幌教会七五年史』（日本基督教団札幌教会、1964年）、

pp.63-84。

- 3 文科国文専攻は国文科に、文科英文専攻は英文科に改組されたほか、児童教育科が新設された。
- 4 女子専門部は1941年の学則変更により文科が設置された後、翌年の学則変更により文科内の英文科に相当する課程は募集停止となった。青山学院一五〇年史編纂本部・編纂委員会他編『青山学院一五〇年史 資料編 I』（青山学院、2019年）、p.553, 555, 593。
- 5 当時の青短は青山女学院卒業生の家庭を下宿先として紹介していたことから、妻が青山女学院の卒業生であったと推測される。
- 6 この点に関しては、加納孝代「思い出の中のシオン寮—女子大学の教育寮での二年間」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』10、2002年）に詳しい。
- 7 中村勝三・大西セチ・金子きよ『欧風料理の基礎』（光生館、1949年）。
- 8 女子専門部にはこうした流れに属するものとは別に、家事労働の技術や裁縫・調理の実務を教授していた一年制の家事専修科があった（1944年に実務科に改組）。